



は、戦地の兵隊のためにアイスクリーム製造機まで送っていたそうです。

コロナの話に戻って、お隣の台湾について。2003年に流行したSARSの経験も生かしながら、デジタル担当大臣のオードリー・タンさんはIT（情報技術）を駆使して、住民へのマスクの迅速かつ安定供給に成功するなど、台湾の取り組みは世界から称賛されました。誰もが使えるデジタルサービスを提供するため、30代（！）のオードリー・タンさん

はいつも、87歳の祖母に相談しているそうです。高齢者に合わせた

イノベーション、使う人の視線に立った仕組みづくりを意識しています。

さて、日本。どんなに立派な戦略や戦術を練っても、スローガンや掛け声が威勢よくても、それが現場にちゃんと伝わらなかつたり、現場でちゃんと機能しなかつたり、実際に使う人々が使えない、使いにくいようでは、何の意味もありません。目詰まりをおこさず、末端にまで行き渡る政策や制度、誰もが使える仕組みをいかにつくるか。永田町や霞が関の会議室だけで考えてもダメで、現場をちゃんと知る。現場で使う人のことを想像する。これに尽きます。

政府のコロナ対策を調査した民間臨時調査会（委員長 小林喜光・三菱ケミカルホールディングス取締役会長）の報告によると、官邸スタッフは「泥縄だった」と総括しているとのこと。結果「結果オーライ」と口にする役人の感覚が私には信じられません。結果オーライの国・ニッポン」でいいわけがありません。あまりに無責任です。

歴史はもちろん、他の国からも

学ぶ謙虚な姿勢をもち、今回のコロナ対応の失敗や反省を、これからの国づくりに必ず生かさなくてはいけません。菅新総理は「国民からみて当たり前のことをやる」「国民のために働く」内閣を標榜しています。そして、縦割り行政を打破するとも言っています。有言実行しているか。菅総理の政権運営をしっかりとチェックすると同時に、引き続き私も、皆さんの声や叱咤激励を力にしながら、国と地方や現場をつなぐ活動を加速

らせていきます。いつも本当にありがとうございます。

きよし



皆さんへのお願い



温かい包容力ある 社会をともに

現時点で、ワクチンや治療薬が存在せず、分からないことだらけの新型コロナウイルスは、脅威で予断を許しません。しかし、日本は欧米諸国と比べて感染者数は圧倒的に少なく、仮に感染しても、重症には至らず軽症のまま治る人が多いのも事実です。

そんな中、怖いのは病気自体ではなく、世間の目だと感じる方も多いのではないのでしょうか。お互いに監視したり、噂をしたりするような社会は息苦しいものです。大戦時の「隣組」を想起させる「自粛警察」は同調圧力そのものです。

どんなに気をつけても、誰もがかかりうる疾病です。もし自分が感染した時の気持ちや立場を想像して、感染した人を非難したり、排除したりしない、温かい包容力のある社会と一緒にしていきましょう。どうか、よろしく願いいたします。